研究

来島町の地蔵菩薩像とその建設者

市野瀬　仁
（会員　佐伯市長島町）

まえがき

このレポートは十余年前、長島区長から同区の歴史を書いて欲しいと依頼され、長島区周辺を一巡して最初に書き始めたのが、自宅に近いこのお地蔵さんでした。

三年ほどかけて平成四年には殆ど完成していましたが、体調を壊して完結には至りませんでした。

平成十四年七月、市報に連載のふるさと探訪「平成塔の旅」の取材のため、市民の窓係長・武田晴美さんが我が家に来訪され、私の話しを聞いて「先生の気持ちになってまとめてみましょう」と、次のように簡潔にまとめられ、市報に掲載していただきました。

萩山遺跡群全景（東から撮影）背後の川は中川（佐伯市教育委員会編）

第二十四回「地蔵菩薩」

この地蔵菩薩は、来島区と中の島区の境、萩山が更地となり、宅地分譲されているところの南端に鎮座しています。四角の土台、蓮の台座、菩薩本体、いずれも御影石からなり、堂々とした重量感があります。

願主（地蔵を造らせた人）は、江戸時代中期、六代佐伯藩主・毛利高慶（たかよし）の重臣であった黒木実応（さねまさ）とその息子実（さね）有（あり）です。実応は下級武士の子として生を享け、側（そば）坊主として高慶に仕えましたが、才を認められ還俗、重用されて家老に上りつめました。

彼は高慶から多くの禄を受けましたが、萩山と長島の新田一帯をことのほか気に入りました。番匠川河口近く、里山と水田の醸す折々の風情と気質が、日毎に彼の心を捉えてゆきました。

信仰に厚い彼は土地の民や祖霊（萩山周辺に眠る民の祖先）と黒木一族の安息を願い、花崗岩の基壇に民百姓・風土への思いと黒木家代々の戒名を刻み、その上に地蔵菩薩を据えたのです。

※参考資料…佐伯史談会・市野瀬仁さんのお話しほか。

（市報さいき　二〇〇四・八・一号　抜粋）

ここに至るには次の方々のご協力がありました。

拓本　米水津村出身　後藤安緒
漢訳　独歩会事務局長（故）大賀與平
　　同右（故）池田　勘
　　元豊南高校長　木許　博
資料提供　佐伯史談会顧問　山本　保
総まとめ　佐伯史談編集長　佐藤　巧

左端③灰石の塔
中央①地蔵菩薩
（庚申塔・青面金剛像）
右端②経王一石一字之塔

脇川家この地に移住

八幡地区の笹良目出身の安部民吉（大正十年没）は、明治・大正にかけて壱岐・対馬・朝鮮方面の魚を買って（干魚も含む）春日丸で尾道方面へ移送していた。

上浦町の福泊出身の脇川萬治（現勝義祖父）は当時春日丸の船員であった。全盛期を過ぎた安部民吉は積年の富をえて、今泉弥左助（現今弥商店）の所有地、俗に「判屋新地」という渡町の六町六反六畝を買いつけた。

その後、脇川萬治は船員からここの新地の管理人となった。

勝義の父作松は「祖父萬治が来た当時は付近に家はなかったが、ここの石造物にどこからか人々がやってきて、年に何回かの祭祈があったようだ」と話していた。たしかに旧佐伯町でこれほどの内容をもつ大地蔵堂を中心とした石造物は珍しい。

場所は「平山造園」の裏、萩山の麓にあった。（萩山は現在はない）今の建物は最近になって脇川勝義が造ったものである。前の畠は家を取りこわしたもので、道路からはっきり見えるようになった。

地蔵堂・右の住宅は脇川家
地蔵様の上屋は平成になって
脇川勝義氏が架けた。

地蔵菩薩の建設者

来島町の萩山南麓に高さ一・五五Mの花崗岩の地蔵菩薩像が安置されている。基壇は横一・三七M、奥行一・三五Mほぼ正方形の上に台座、その上に蓮華があり、菩薩の高さは〇・七Mとなっている。基壇の四面に、それぞれの文字が刻まれているので、正面から左回りに読むことにする。

地蔵菩薩像　基壇の四方に銘文が刻まれている。

【南正面】黒木家一族の戒名

実相院経入居士　天室宗清信士
森松院圀誉寂貞法女　陽嶽妙春信女
○眼院○○○○○尼　青月光圓信士
院幻○芳童子
○○院○誉寿光大姉　○月湛○童子
即光院心誉○○居士　霊堂受○童子
教安院心誉妙松大姉　経霊童女
竹友院存誉助給居士　○宣童子
○光院教誉回貞大姉
運性院載誉法瑞居士　○了院木禅覚居士
諸寫一字一石大乗三部妙典

本寿院覚誉宗○居士　林○道源信士
慈明院○誉貞○大姉　○誉妙貞信女
心善院道誉○○居士　妙意月持信女
霊性院源浄○貞大姉　光院妙取信女
江霊宗○居士　源○宗三信士
霊山妙白信女　観月映空信女
○立院近意○受　月窓浄心信士
秋月涼心童女
瑞光○旭童子　恵本智眼信女
萬巌恵隆比丘尼　白峰智○信女

【註】○は摩滅して不明

【西側面】

法屋利性　此精矣者雖
三界満霊　無縁也者墓
所故誌此

【註】法屋利性：戒名のこと
精霊：万物の根源をなすという不思議な気

【北裏面】

夫書寫一石一字大乗／三部妙典造立六道能
救薩埵像意趣者新開／此境地在嶺雲山先祖
之廟悉移轉此旃旃為／追福供養侈造之者也
願主　黒木右膳實應／黒木要人實有

【読み下し】それ一石一字の大乗三部妙典を書写し、六道能救の薩埵像を造立する。意趣はこの境地を新開し嶺雲山に在る先祖の廟を悉く移転し追福供養のため、この旃旃に侈造するものなり。

【註】能救（のうく）同情の心を救う
嶺雲山（れいうんざん）潮谷寺
薩埵（さった）菩薩に同じ
旃旃（はいせん）あら糸で造ったはた
侈造（しぞう）おごりつくる

【東側面】

寛保五乙丑年／三月十四日

【註】寛保五年は延享二年となる（一七四五）
大賀與平通釈

願主二人の関係は実応が父、実有はその子であることが『藤原姓黒木家系図』に知ることができた。

【註】西上浦の会員野々下晃氏が潮谷寺と深い関係にあることから右の史料を得た。

地蔵菩薩とはどんな菩薩か

釈尊の没後から弥勒菩薩が成道するまでの無仏時代における衆生済度を付嘱された菩薩。左手に如意宝幢のある蓮華、右手に宝珠（月輪）を持つ。

信仰は唐代、わが国では平安中期から無数の分身に変化して衆生済度するから千体地蔵と称し、最も親しまれ比丘形で左手に宝珠、右手に錫杖を持つすがたが普通になった。

また、鎌倉時代以後、民間信仰にとり入れられて、賽の河原では童児の救済者として和讃にまで唱されて、子育地蔵・子安地蔵の名があり、六地蔵の参詣も多い。

（仏教語大辞典・中村元）

経王一字一石之塔

一字一石の塔には、享和三年（一八〇三）安土屋治兵衛統恭が父の弥次右衛門統貫の供養のために建てたとある。

時に享和三年三月十四日

以前妙心寺に住み、紫方袍を賜った比丘全珠月山

養賢寺十二世大和尚の謹銘。

【註】大和尚は養賢寺住職を三十二年つとむ

泥谷の産。

経王一字一石之塔と銘文（正面と背面）

この石塔は、地蔵菩薩から五九年を経て建てられたものである。

【書き下し】

己を倹にして人に施すは固より難しと為すなり。志を継ぎ孝を成すも亦易からざるなり。弥次右衛門、氏は今泉名は統貫なる者は藩の中街の古き商家なり。性質篤実、頗る物を恵みて三宝に帰依す。

法華経を看読すること凡そ七百部に及ぶ。春秋六十八にして俄爾に逝く。その子治兵衛統恭、泣きて喪す。事了りて敦く先人の読経の志を思う。蓋ぞ千部果さざる者在らんや。

自ら看読して以て之を嗣がんと欲するも、則ち商事鞅掌なり。手を緇徒に仮り小石の扁にして碁のごときを鳩めしむ。

子は六万九千三百有奇字を書写し、諸を爽塏の地にうめ、堅珉に録して塔を建つ。

嗚呼、孝子匱しからざるかな。銘を請ふに之が為に銘す。

夫れ副墨の子を以て　転じて妙法の華を得　止々須らく説くべからず　事事却如麻（「事事…」の句不詳）

群生十方に分かれ　一路三車に駕す　毎石毎字の績
勝因自家に帰す
時に享和三亥三月十四日
前に妙心に住みて、紫方袍を賜はりし比丘全珠月山
謹みて銘す。

願主　安土屋治兵衛統恭

【註】漢字を通用のものに改め、難読のものにふりがなを付した。　解読　池田勘

明治四年頃　佐伯藩時代屋敷図（山本保資料）
右下方に判屋治兵衛（酒場）と屋敷あり。

灰石の塔

背の低い灰石の塔には、文政七年（一八二四）今泉広吉統貞が信心深く、喜捨の行いが多かった。と養賢寺の住職がほめたたえている。

十五世養賢寺住職通應和尚　謹銘

この塔はさきの経王一字一石之塔より二十二年の後に建てられたものである。

【略意】　平成十年九月二十四日　木許（博）案

日本全国六十六州の各州の国分寺には大乗妙典が一部納められており、一つ一つの霊場に経典を一部ずつ納めて巡る行者を六十六部と呼ぶがそれは我国昔からの風習である。

今泉広告統貞は仏信仰あつく行乞の者を見かけるとかならずお布施を行い、喜捨（寄進や施し）の一部は病院とか弧児などの施設に捧げることが長年続いた。

人々が家の前を通るときは、今泉家の家の門や壁や柱に納経の紙を貼って当家の善行を讃えたがその数はたいへんなもので代々箱に納めたものは数えきれないほどであ

る。こうして今日以後、放失のおそれがあるためにどこかの穢れのない所に穴を掘って標石を建てることとなった。このたび私は碑文を書くにあたり、今泉家の善行に感じて随順歓喜の念で仏のめぐみにひたっている。

六十六州巡詣の善き因縁を得て随順歓喜のご利益ははかりしれない、無限の法悦……。

文政甲申（きのえさる、七年、一八二四）

今泉広吉統貞が碑を建てた

灰石の塔と銘文

江戸時代中興の将軍と藩主

八代将軍徳川吉宗は中興の英主と称えられた。次の家重に引継ぎ、幕府の新田開発による年貢増徴の政策で、幕政改革は成功を収めた。（一七四〇年代）

こうして情勢は、必然的にわが佐伯藩にも及び新田の開発が進められた。即ち方島から中江・渡町・長島・女島にかけての沖積低湿地帯が、城下両町の有力者の投資によって、続々と干拓されて新地・新田が出来た。

（佐伯市史）

さかのぼって元禄十二年（一六九九）、わが佐伯藩の中興の英主六代高慶は治世四十四年にわたって多くの功績を残した。一方徳川吉宗は享保元年（一七一六）から延享三年（一七四六）まで三十年間執政し、共に同時代に生き、中興の英主として崇められているので、記憶に残る二人である。

黒木実応はどんな人物であったか

高慶が佐伯藩主として布告した条目の第一に武芸専ら相たしなむ事としている。それに注目をした人物に、農

政の功労者小林九左衛門吉晴の子に家老小林典膳（師胤）と御家老となった黒木常右衛門（実応）がある。

黒木実応は小役人の子であったが、高慶の側近になって才智と胆勇を認められ還俗して徒士となり常右衛門と名乗った。実応は鉄砲に巧みで腕力があり重さ十五貫の長銃を操作した。家老となり監物または右膳と称した。

（佐伯市史）

元文四年八月高慶が病床にあり黒木実応、長谷川元師、戸倉紀庸（のりつね）が侍っていた時、高慶は

「今度の病は到底癒える事はあるまい、多分このまま死に行く事であろう」

と云うと、黒木実応は

「昔殿と私が冑をつけて試合をした時殿は二回刀で之を斬り一つは浅く一つは比較的深いものでありました。何と云う勇壮なことであったでありましょう。それより廿年の月日は去り、今は不治の病にかかり病み疲れていられる事は残念でなりません」

と云って言葉も訖り涙を流した。高慶は

「その冑は今どこにあるか」

と問うと私の所にありますと答えた。高慶は

「その冑を武庫に蔵して子孫の講武の一助にせよ」

と云った。

（中　略）

黒木実応の如きは高慶の死を悼み殉死せんとした程で実に佐伯藩中興の英主にふさわしい家臣であった。・・・・

寛保三年十一月家老黒木実応が高慶の死を悼み薙髪して遁世の志ある事を知って、七代高丘は之を慰撫し佩刀を与えた事もあった。

（中　略）

この時代の人として黒木実応、清田津右衛門、堺田兵助の三人を挙げる事が出来る。黒木実応は初め高慶の側坊主より起用され後家老となった。人となり砲術を善くし長さ二尺八寸、重さ十五貫の唐獅子と云われた銃を双手に持ち、よく二町外の的を射た名人であった。

（「佐伯郷土史後編」増村隆也著）

黒木実応の墓は潮谷寺墓地にあります。

寶暦四甲戌天閏二月十七日（一七五四）

謄雲院觸誉光蒙實應大居士

俗名黒木右膳實應

あとがき

享保十四年、公高慶は潮谷寺阿弥陀如来を尊崇して常に龕扉を閉ざし、人をして参拝するを得ざらしむ。新たに仏像を賜りて之に代ゆ。（鶴藩略史）・また本尊阿弥陀仏は仏師定朝の作という。前立の阿弥陀仏は高慶が納めたものとあります。（佐伯市史）

一方黒木実応は勇ましい武人だけでなく僧籍を体験したほどの人格者でした。こうした両者の信頼関係は並々ならぬ厚いものを感ぜざるを得ません。

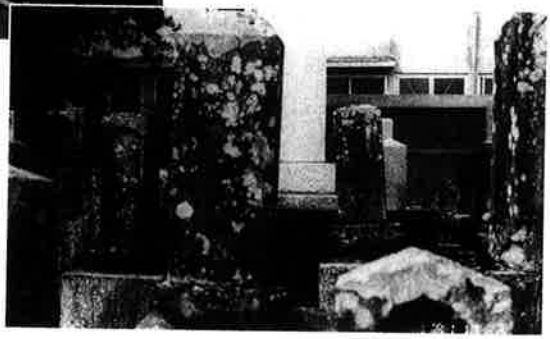
あの来島町の地蔵堂には「経王一石一字之塔」と今泉広吉二つの塔がほめたたえているではありませんか。じっと三百数十年前の当時を想像するに、唯の一軒の家もなくさびしい中に、萩山という城下町の平野の中心の山麓に地蔵さまを安置したのです。

このような歴史的背景をもつ堂々たる地蔵様は城下にはないと信じます。今日の世相に当たって、史談会員をはじめ佐伯市民に、このことを知っていただけることを幸いに思っている次第です。最後に執筆にご協力していただいた方々と脇川勝義さんに報告が遅くなった事をお詫び申し上げます。

【潮谷寺墓地案内】

歴代住職墓地の向こう側に黒木実応・実有父子の墓、縁籍小林晴胤の墓もありました。

正門脇の黒板には高慶が潮谷寺明誉上人に送った和歌が書かれていました。



おろかなる
身をば救わん
言の葉の
弥陀の教の
道しるべせよ